



# 学校だより

令和2年4月8日 上田市立第二中学校 No.1

## 令和2年度の幕開け

新たに103名の1年生が加わり、全校で285名を数える第二中学校の令和2年度がスタートしました。新型コロナウイルス感染予防に伴い、多くの制約がある中ではありますが、「二中で中学校生活を送ることができて、本当によかった」と心から思える学校生活になるように、学校職員一同、全力で生徒を力強く支えて参りたいと思います。保護者の皆様には、ご支援とご協力をいただきますよう、よろしくお願いいたします。



入学式前の新入生の教室にて

始業式、校長先生が次のようなお話をしました。

現在、新型コロナウイルス感染が世界に大きな混乱を招いていますが、江戸時代の1800年代、日本に天然痘とコレラが流行しました。多くの人々がなすすべもなく亡くなっていく現実を目の当たりにした13歳の少年が「医学を学び、悲惨な病から人命を守らなければならない」と志を立て、日本で初めての種痘、「コレラ予防」の医学書を書き、全国の医者に無償で配る実践を行いました。この少年が、緒方洪庵先生でした。

洪庵先生は「人のために、道のために、世のために」という言葉を大切になさっていました。「自分の夢やしようとしていること」を「人のために」という視点で考え、行動しようという意味です。

幕末であった1838年、洪庵先生は大阪で医者として開業すると同時に、共に医学を学ぼうと「適塾」を開きます。医学生のための塾だったのですが、そこには医学を目指すものだけでなく、多くの若者が洪庵先生を慕って多くの人々が集まりました。

現在の慶応大学の前身の慶応義塾を始めた福沢諭吉は、身分差別の激しい中「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」と学問することの本質を貫き通し、明治時代の教育の礎を築きます。

幕末の戦乱の末期、北海道の五稜郭で起きた函館戦争で、敵・味方を問わず、負傷者を治療した医師高松凌雲は、「医師というものは、患者に自分の全てを注いで奉仕するものであり、貧富の差や身分の高低の差で差別してはならない」という信念をもって、日本の医療の礎を築きます。

1867年パリ万博で、敵味方なく負傷者を治療する「赤十字活動」を知り、西南戦争負傷者を手当てる赤十字活動を始めた佐野常民は、世界で初めて災害時にも負傷者の救護にあたる活動を展開し、現在の3つの柱の1つである「平時救護」の礎を築きます。

この他にも、幕末の思想家『啓発録』という書籍で、『稚心を去る』と心に決め、今も日本各地で14歳の時に行う立志式の基を築いた橋本佐内や、「衛生」という考えと言葉をつくり、上下水道の整備や健康維持のための「海水浴」という考え方を日本に位置付けた長与専齊、さらに富国強兵のために日本の産業・工業の発展に尽くした大鳥圭介や、種痘を世に広めた漫画家手塚治虫の曾祖父の手塚良仙など、「適塾」からは日本の近代を支えた多くの人々が生まれます。

これらの人々を育てたのが、洪庵先生の適塾でした。その跡は今も大阪にあります。門もなければ、運動場もない二階建てのただの民家です。塾生たちは、その二階で寝起きしました。そこは、教室でもあり、塾生たちは、そこでひしめくようにして暮らし、勉強していました。

しかし、素晴らしい学校でした。入学試験などはありません。勉強したいという目的を持った若者が、全国各地から、はるばるとやってきました。江戸時代は身分差別の大きな時代でした。しかしこの学校は、いっさい平等です。侍の子もいれば町医者の子もいます。農民の子もいました。彼らはただ、「学問をする」というただ一つの目的と心で結ばれていました。先輩が先生となって、後輩たちを教えました。

「人のために」「道のために」「世のために」一体何が出来るのか、自分の生きる道を絶えず問いながら、「学問をする」という目的で一つにまとまった学校が、日本の近代化を進めました。そして私たちは、そんな人々のおかげで今の日本を生きています。

第二中学校の皆さんは、大きな力を内に秘めています。そして、それを高め合える雰囲気をもつ学校でもあります。令和2年度、私たちが自分の夢に「周りの人のために」「自分の進むべき道のために」「これから巣立つ社会のために」自分は何が出来るのかということを考え、自分の命を輝かす道を探り、共に学び高めあう学級・学年・学校をより磨きあげていきましょう。